

週刊 武四郎

第51号

2019年(平成31年)3月27日(水)
発行・松阪市

●毎月第四週は、
松浦武四郎のコレクション
についてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

最後に……

この連載も最終回を迎えましたので、最後に松浦武四郎さんが残したお墓について書いておきましょう。晩年の武四郎さんは秘境といわれる大台ヶ原に三回も登って、自身の立派なお墓を建立しました。でも……結局、

遺骨はそこには埋葬されませんでした。東京の今戸にある称福寺に遺族の手によって新たに墓が建立され、現在は駒込の染井

霊園に移されています。

この染井霊園の墓所には、武四郎さんのたった一人の娘、一志の墓もあります。へなむあみだぶつと幼子の文字が墓標に刻まれています。これは娘の手習いの文字をそのまま墓石に刻んだものです。この墓石の文字を見ていると、幼い娘を亡くした親心が痛いほど伝わってくるような気がします。その一方

で、こんな風に亡くなった人を身近に感じられるお墓を造ってしまうその創意工夫には感心させられてしまうばかりです。

さて、最終回なので、今までの記事の中で、その後、誤りに気付きましたことについてお詫びと訂正です。

9月19日号において、武四郎さんを絵師国芳に紹介したのは国芳の師匠でもあった柴田是真ではなかったか、と書きましたが、当時へ柴田収蔵」という天文方に勤めている人が関係していたことがわかりました。この天文方の柴田さんと武四郎さんが、どう

いう関係だったのかはよくわかりません。

それから、9月26日号の武四郎さんの手紙の最初に「スジコの件」と用件が書いてある、と記しましたが、これはもともと時候の挨拶からちゃんと始まっている手紙なのです。昔の手紙は最後の部分が最初の余白や上部にくることがありまして、それが偶然今のメールのように見える、ということなのです。言葉足らずで誤解を招くような書き方になってしまいましたこと、重ね重ねお詫びし訂正

いたします。

武四郎さんは、その小さな体で大きな業績を残しましたが、その膨大な作業をこなす姿は、どこか楽しげにも見えます。好きなことに没頭していると人は思いがけない力を発揮するのでしょうか。そうした自分にしかできないこと……一人一人がそれぞれの一筋の道を見つけることの大切さを、武四郎さんは常々語っていたといえます。

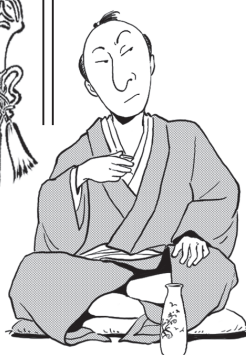
私たちはこの「熱き奇人」にまだまだいろいろ学ぶことがありそうです。



▲「なむあみだぶつ」の文字が刻まれた一志の墓標

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなる「北加伊道」を含む6案を政府に提案したことから「北海道の名付け親」と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

